

入墨刑のこと 釈文

①上

史料A 入墨仕置の事 徳隣殿秘録

入墨御仕置の事

一 囚人掛り呼出、入墨申渡、致帰牢候得ば

腰縄にて下男縄取、牢屋同心一人附添、

牢屋見廻り詰所前砂利上へ筵を敷、

其上へ居る。椽側へ薄縁敷、当番の鑑役

着座、出牢證文に引合、名前・肩書・歳

附・入日・掛り、入墨申渡の儀等相改、非人

手伝、左の腕を◇脱、下地腕彫物の有無相

改、墨にて筋二行引廻し、針にて彫み、非人

指にて墨を入附、針跡へぬり、両手にて摺込

手桶へ腕をわたし、水にて墨を洗ひ

とくとぬぐひ、針行届ざる所を針に

墨を付、猶又彫入、前の如く洗ひぬぐ

ひ、牢屋見廻、石出帯刀見分の上、筆にて

①下

墨を濃く二筋引廻、紙にて巻しごき

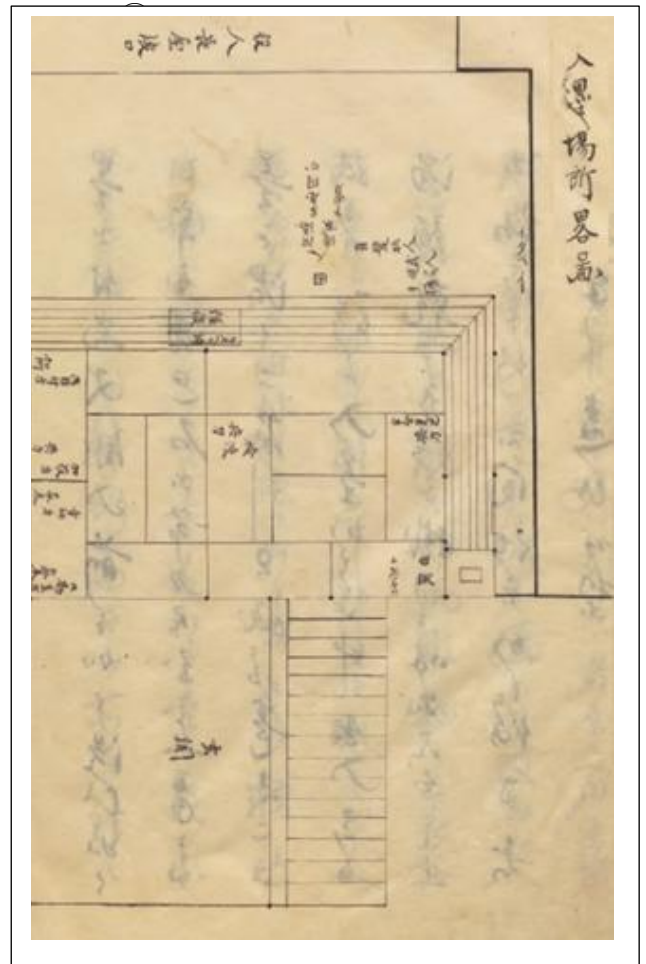
紙にて◇ふ。入墨かわき中、出入三日

溜預、渴き候様子、掛りへ呼出、見分の上

出溜、三奉行は同仕方、加役方は

手続少し違ひなり

②上



入墨之図

牢屋付き◇◇

小伝馬町河岸

小屋頭

非人

日抱

有髪

非人

縄取

牢屋下男



- 一 江戸入墨初りは享保五子年二月十七日
仰渡、同年五月十一日、中山出雲守掛にて長崎
町平兵衛と申もの、江戸橋に橋杭膜鉄物を
外し候依科、入墨の上、湯違法に成る。
- 一 同女の墓は寛政元酉年十一月五日松平
和泉守殿御差図附盗賊改役長谷川平蔵

②下

小日向西古川町吉平店八五郎蛇母つたと
申女、湯屋にて衣類◇盗取も依科入墨
の上、過怠牢舎成、是女牢の初め也。

中三分程

江戸



此開き七分程

同増入墨者、安永六酉年十一月晦日、松平
右京大夫殿被仰和、同七亥年六月廿一日
牧野大隅守掛り子かね宿権次郎、初て増
入墨に成。

有来入墨の上の方へ

増入墨



◇未入墨

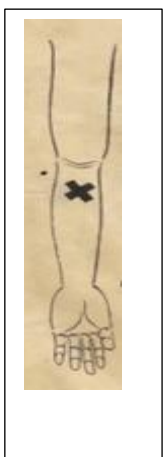
- 一 人足寄場入墨は寛政五日十一月五日

池田筑後守御御番所より牢屋敷米へ図相渡、寄場
内にて入墨相当の者は如此入墨申付、入墨にても

③上

- 一 本罪入墨当り候候者は是迄の通入墨申候
寛政七卯年八月より牢屋敷にて入候事に極る

人足寄場



表三寸、巾三分ほど

赤井越前守勤役中より両腕へ入
肩より五寸下て両腕

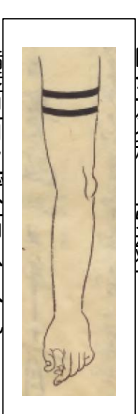
京



◇三分四寸程

巾三分程 引廻す

大坂



腫者有之ば右へ入れ

手首より三寸程上り

長 一寸五分、巾五◇ ほど

長崎



腫物有之ば右へ入

寛政十一末年注四月入牢者肩書に伏見入

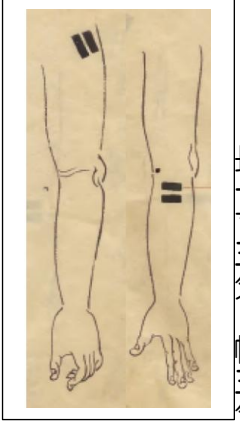
③下

墨と有之

長一寸三分、幅三分ほど両腕に入

伏見

奈良



幅三分ほど引上す、

文化十三子年

入牢者肩書に

奈良入墨と有之

図の如く



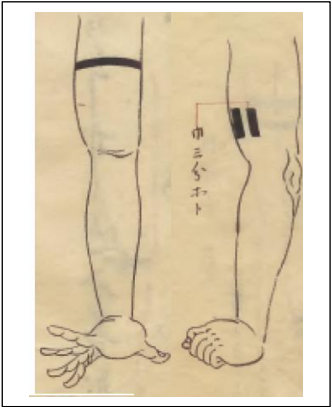
是明一寸三分余

寛保三亥年七月廿九日より初る

駿府

山田

幅三分ほど



るから

寛政四未年四月十五日より初る

堺

肘より一寸五分

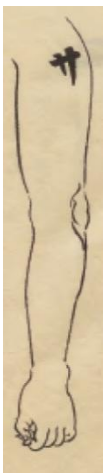


幅三分程引廻す

④上

浦賀

佐渡



寛政三亥年七月評議之上 日光奉行にも

山口新左衛門取計中の通の通入墨◇相用可

申旨松平越中守殿御下口

日光

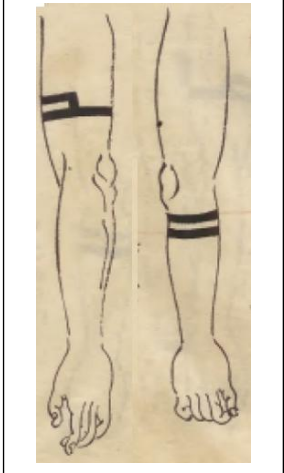


文化十四年七月九日入牢甲州入墨の
肩書立之

甲府

此間八分程

郡代



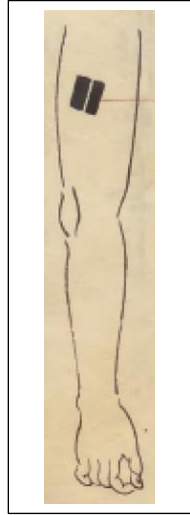
穢多頭弾左衛門入墨

幅四分程

④下

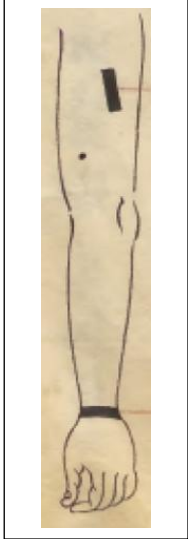
- 一 非人致欠落立帰候得共、急度叱り置、欠落
兩度に及び候えば一筋入墨三度に及び候得ば
一筋増四度及び候えば死罪

欠落入墨
の図

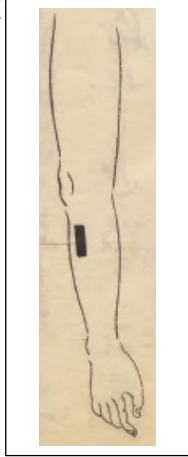


右の通入来候処、寛政二戌年五月
池田筑後守申渡左の通改

日
当時の図



- 一 入墨御仕置相当の仕置可申付旨にて引
渡し相成候もの。并盗賊致し候て入墨の
者は如図



長二寸、巾三分

⑤上 釈文省略

⑤下

史料B 再犯者への入墨

(一)

天保十五年九月朔日 差出

私支配

非人頭松右衛門 手下

麻布三軒家町

小屋頭幸治郎抱

天保十五年辰年七月

非人頭松右衛門手下幸次郎抱非人

竹蔵欠落咎入墨之場所に領主

入墨有之、弾左衛門より伺出候に付取調

天保十五年九月朔日差出



私支配

非人頭松江衛門手下

麻布三軒家町

小屋頭幸次郎抱

非人にて欠落致し候

御領主様入墨

竹蔵

右のもの儀、盗賊火附御改

太田運八郎様御掛にて不届有之

⑥上

如元入墨の上、江戸払相当にて、当月三日、私へ被遊御引渡候処、右は尾張様御仕置入墨の儀に付、私方にて入墨仕兼候間、運八郎様御役所へ御伺の上、私方悪事入墨の場所右の手首に入墨申付候上、在方へ引渡可申手続に御座候、然る処、此者儀は先達て欠落致し候ものに付、欠落咎入墨老筋可申付処、右場所に前書
御領主様入墨十文字に彫入有之候を消紛罷在候儀にて、右躰私方欠落咎入墨彫入候儀も奉恐入候間、右入墨を除、彫入可仕哉、此段乍恐以書付右取計方御同奉申上候、以上

浅草

辰七月廿二日

弾左衛門

⑥下

辰八月廿七日為相談廻、同晦日挨拶下げ札付返却

内匠頭殿

鳥居甲斐守

甲斐守殿

鍋島内匠頭

非人頭松右衛門手下

麻布三軒家町

小屋頭幸次郎抱

非人にて欠落致し候

繁吉事

領主入墨

竹蔵

右竹蔵儀、火付盜賊改太田運八郎雇方へ被召捕不屈有之、如元入墨之上、江戸払可申付処、非人之儀に付、相当之仕置可申付旨申渡穢多頭弾左衛門へ引渡相成同人方にて相改候処、右は尾張殿領分仕置入墨を消紛し罷在

⑦上

候儀に付、如元入墨之彫入兼候間其段、運八郎方へ様役所へ伺之上、右の手首に弾左衛門方悪事入墨申付江戸払申渡候手続に有之候処、欠落致し候ものに付、同人手限りにて定め法の通左肩より腕に掛、欠落咎入墨彫入可申処。右場所に尾張殿入墨有之、差支候間、右入墨を除け下の方へ欠落咎入墨申付度旨、拙者方へ伺出候間、牢屋敷をも相糺候処、入墨御仕置之儀は彫物又は

痛所等有之候共、右に不約定例の
場所へ彫入候仕来之由、申立候得とも、
右は他彫物之儀にて見合には難
相成候間、勘弁致し候処、私領の
入墨にても掛合之上、盗之入墨に
相違無之候は、前科に相立候旨、明和
度の評議済に見合ては
公儀御仕置みも准じ候儀に付、弾左衛門
⑦下
伺の通、尾張殿入墨を除け欠落
咎入墨申付候様差図可致哉と
存候、依之別紙書類相添及
御相談候

辰八月

下げ札

御書物別紙共一覽致し
候処、拙者儀何の存寄無之
被御申越訴通、弾左衛門へ
御差図有之可然存候、依之
書類返却、此段及御挨拶候
辰八月 鳥居甲斐守

⑧上
辰八月廿日差出

一 私支配四ヶ所非人頭と申の手下小屋頭

抱非人共之、御領様入墨有之

候は諸御役所様へ御召捕等り相成

御吟味之上、右入墨を消紛罷在

如元入墨之上、江戸払相当御引

渡相成、私方にて如元入墨之上江戸払

申付候例、取調可書上旨被

仰付候間、取調候処、私方始め年

以前、寅年十一月中、自火にて諸帳面

焼失仕、抜々に相成候間、残之分

取調候得共、右様之例乍恐相分り

不申候、尤八年以前丙午十月廿九日

落合長門守様御加役御勤役中

右御役所相掛にて私支配非人頭

手代松の手下、谷中天王寺門前

⑧下

代地浅草山川町裏通砂利場

小屋頭弥右衛門抱非人にて大坂入墨

友吉事釜次郎と申もの、右

入墨を消紛、如元入墨之上、江戸払

相当御引渡に付、私方にて悪事

入墨之場所右之手首へ入墨

申付候上、江戸払申付候儀に有之、
且又肩より腕へ掛入墨有之、私方
欠落咎入墨申付け候場所に差支
是迄差略仕候前例等前書奉
申上候通、相分兼申候、依之乍
恐以書付奉申上候、以上

浅草

天保十五年八月廿日 弾左衛門

盜賊火付御改

太田運八郎様御掛

非人竹蔵御証文写

◎上

非人頭松右衛門手下

麻布三軒家町

小屋頭幸次郎抱非人にて

欠落致し候

繁吉事

領主入墨

竹蔵

辰廿六

此もの儀、先達て盜致し候依咎
領主にて入墨之上、重追放領分之中
之外他領他国住居致間指揮身

分に相成候後、大坂表へ参。非人手下に
相成、御当地へ出非召捕、無罪無宿にて
引渡に相成候後、入墨を消紛、其上
悪事相止、「品川在村、名不存
野田にて無宿躰之者五六人手合に
加り、◇◇にて四五拾紙◇之賽博奕
壹度致し、相勝候錢代之代、怪敷品と
乍心付き。紙入金子入請取、右所預け
置錢かり受け、不残遣ひ捨候段

◎下

不届に付、如元入墨之上、江戸払可
申付処、非人之儀に付、相当之仕置
可申付け旨申渡、穢多頭弾左衛門へ
引渡

辰七月三日

右の通御座候、以上

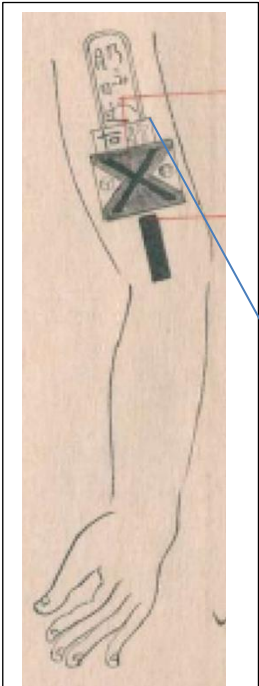
浅草

辰七月廿五日

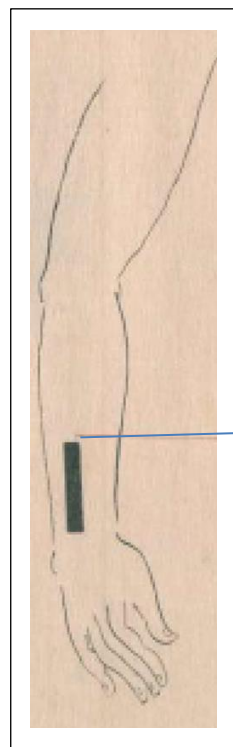
弾左衛門

此如尾州様入墨相透に彫入候処、消紛
罷在候儀にて私方欠落咎入墨可申付
場所に御座候

如此欠落咎入墨は彫入可申候



如此御掛御役所へ相伺之上、新にいけ除欠
私方悪事入墨申付候



⑩上

遠山金さんの入墨禁止令

入墨禁止令 文化八年八月

近来、軽きもの共、ほり物と唱、惣身へ種々の絵、又は文字等をほり、墨を入、或は色入等に致し候類有之由、右躰の儀は風俗にも拘り、殊に無疵の惣身へ疵付候は銘々恥可申儀の処、若きもの共は、却て伊達と心得候哉、諸人の陰にてあざけり笑ひ候をも存はからず、近頃は別て彫物致し候もの多く相見、不宜事に候間、向後手足は勿論、惣身へ彫物いたす間敷候、能々町役人共よりも為申聞、心得違の儀無之様可申諭候、且又右ほり物致し遣候ものどもは、人に任頼候とは乍申、いみきらふべき事を不差構え、好にしがいい彫遣候は、別て不埒の事に付、此度吟味の上、夫々咎申付候間、是又自今相止候様、役人共より能々可申聞候

⑩下

入墨禁止令（御触書天保集成八十一巻）天保十三年三月八日

市中取締掛り

名主共

近来、軽きもの共、ほり（彫）物と唱、惣身へ種々の絵、又は文字等をほり、墨を入、或は入（いろいり）等にいたし候類（たぐい）有之由、右躰の義は風俗にも拘り、殊に無疵の惣身へ疵付候は、銘々恥可申儀の処、若き者共は、却て伊達と心得、諸人の陰にてあざ（嘲）けり笑ひ候をも存（ぞんじ）はばからず、別て彫物いたし候もの多く相見、不宜よろしからざる事に候間、向後（こうご）手
足は勿論、惣身へ彫物致間敷（まじく）候、能々（よくよく）町役人共よりも為申聞（もうしきかせ）、心
得違の義無之様可申諭候、且又右彫物致遣候もの共は、人々
任頼（にんらい）み候とは乍申、い（い）みき（き）ら（嫌）ふべき事を不差構、好に随ひ
彫遣候は、別て不埒の事に付、右の趣、文化八末年申渡置候処
又々近頃は致増長、鳶人足、駕籠昇渡世のもの等、彫物無之候ては
仲間入不相成様成行候趣に相聞、右躰の儀は有之間敷事に候、自今
心得違いたし、新に彫物致候もの於有之は、彫遣候ものは勿論
其もの召捕急度申付、其次第に寄、町役人共迄咎申付候条
能々町役人共より店々へ、并若年のもの共へは別て厚く可申諭
但右申和の趣町々番屋へ張出し可申
右の通、従町御奉行所被仰渡候間、早々一統申通、急度可
相守候
右の通寅三月八日、館にて申渡